



歯

磨

剤

の

略

歴

鎌倉市歯科医師会
小林 晋二郎

歴史は古く、

古代エジプトから

歯磨粉や練歯磨、液体歯磨などを総称して、「歯磨剤」といいます。

歯磨剤の歴史は古く、文献的には古代エジプトの時代までさかのぼることができます。紀元前1550年頃のエジプトでは、歯磨粉として乳香、緑青、緑粘土などを用い、練歯磨としてはピンコウ樹の実や緑粘土、蜜、火打ち石、緑青を混合したものを used とされます。紀元前5世紀頃、医学の祖ヒポクラテスは、歯磨剤として野ウサギの頭蓋骨を焼いた灰、大理石などを細かく砕いたものを混和して用い、磨いた後は、白ブドウ酒に葉草を浸した液体で、うがいするよう推奨したそ

うです。

さまざまだった

自家製歯磨剤

自家製の歯磨剤は、実にさまざまだったようです。たとえば16世紀の劇作家シェイクスピアは、口臭対策のために酢と水で口をすすぎ、乳香樹脂を噛み、ハッカや丁香などの入った水を煎じた液で洗口したといわれています。また、19世紀の印象派の画家ルノアールは、朝夕、塩水で口をすすぎ、木の小片で歯を清掃していたそうです。塩はかなり以前から歯磨剤として使われていたようです。

日本では、江戸時代以前は楊枝を噛んで歯磨の代用としていたように、塩や力キの殻、珊瑚なども使われていたようです。

日本の歯磨剤は

江戸時代から

日本の歯磨剤の元祖は、1625年(寛永2年)、丁字屋喜左衛門が製造・販売した「大明香薬砂」という商品名の歯磨といわれています。当時の江戸っ子は、歯を真っ白にするため誰も彼もが歯磨を好んで使い、同時に口臭予防にも努めたため、歯磨剤は実に数多く製造・販売され、江戸の名物としても人気だったようです。

明治時代に入っても、日本の歯磨剤は、房州砂ぼうしゅうにハッカや丁香を入れた粉歯磨が主流でしたが、1888年(明治21年)、初の練歯磨として「福原衛生歯磨石鹸」が発売され、その後も「鹿印練歯磨」「ダイヤモンド歯磨」「象印歯磨」「ライオン歯磨」などが続け

て発売されました。

上手に使う

お口の健康維持を

大正末期の1925年、初の半練の潤性歯磨剤「スモ力歯磨」が発売されました。昭和期に入り、太平洋戦争のための特製中止などをはさみながら、特に昭和30年代以降歯磨剤は、従来の研磨剤を主体としたものに、殺菌剤や消炎剤などを加え、さまざまに工夫を取り入れながら発展してきました。

かつてに比べ、格段に進歩した歯磨剤。効果の程度はさまざまですが、上手に活用して、お口の健康の維持・増進に役立てていただければと思います。

(こばやし 歯科)

参考文献

・セルフケアのための

歯磨剤ガイド

伊藤春生・監修